

月刊 都響
2022 June



気を付けてね！ ホールでの過ごし方

- 携帯電話や音が鳴るモノは電源を切りましょう。
- 演奏中はお話しないで静かに聴きましょう！
周りの人も演奏を楽しみに来ています。
- 録音・録画、写真撮影は禁止です。

2022
6/26

Promenade Concert

プロムナードコンサート No.397

指揮／クラウス・マケラ

サウリ・ジノヴィエフ：バッテリーア (2016) [日本初演] (10分)

シヨスタコーヴィチ：交響曲第7番 八長調 op.60

《レニングラード》 (79分)

※本公演は休憩がございません。舞台転換中にホールの外に出るとお席に戻れない場合がございますのでお気をつけください。

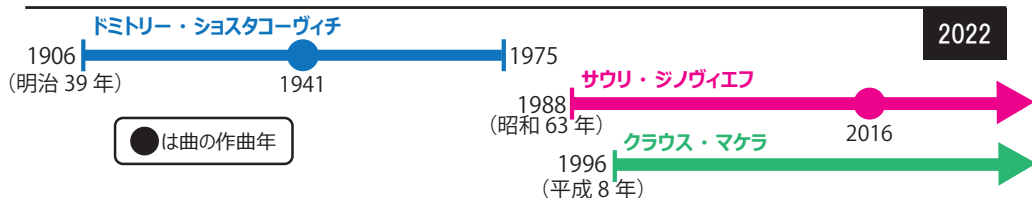
東京都交響楽団

PROGRAM NOTES

今日のコンサートで指揮をするのは、フィンランドの指揮者クラウス・マケラさんです。1996年に生まれたマケラさんは26歳。指揮者としてはまだ若い人ですが、ヨーロッパの国々ではすでに大活躍をしています。本当は2020年の4月に都響を指揮する予定でしたが、コロナの影響でコンサートが中止となってしまい、2年たってようやく登場してくれることになりました。今日のプログラムには、現代のわたしたちが考えさせられるようなマケラさんからのメッセージが込められているように思います。



Timeline



サウリ・ジノヴィエフ：バッテリー (2016) [日本初演]

最初に演奏されるのは、サウリ・ジノヴィエフさん（1988 年生まれ、34 歳）という、指揮者のマケラさんと同じフィンランドの作曲家による《バッテリー》という曲です。2016 年の作品で、日本では今日初めて演奏されます。

《バッテリー》というタイトルの言葉をそのまま訳せばバッテリー、つまり「電池」ですね。強いエネルギーを感じさせる言葉です。ジノヴィエフさん自身は、「精力的で技巧的な音楽を探求した」と述べています。およそ 10 分ほどの作品で、曲の前半はオーケストラが厚みのある響きを奏でます。後半は音楽がリズムカルに動き出し、終わりまでスピード感を増していきます。曲の冒頭や、重要な場面では、教会の鐘のようにベルが鳴り響きます。

ジノヴィエフさんがこの作品を作った 2016 年には、パリやブリュッセルやニースで連続テロが起こるといった痛ましいニュースが流れました。ジノヴィエフさんはその衝撃的な出来事に心を動かされ、「生命に捧げる作品」としてこの曲に思いを込めたそうです。鐘の音には祈りが込められているのかもしれませんが。昨今もまた、戦争のニュースが連日のように伝えられ、平和について考えさせられることが多くなりました。音楽を通じて人々の命や平和な暮らしの尊さに思いを巡らせる大切さを、ジノヴィエフさんの作品があらためて気付かせてくれます。

ショスタコーヴィチ：交響曲第7番 ハ長調 op.60 《レニングラード》



ソビエト連邦時代のロシアの作曲家ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～1975）がこの交響曲を書いたのは1941年、つまり第二次世界大戦のさなかです。ロシア北西部のレニングラード市（現在のサンクト・ペテルブルク）で書き始められ、市民に捧げられたので、副題に《レニングラード》と付いています。全部で4つの楽章で構成されています。

当時、レニングラードはドイツの軍隊によって包囲されてしまったことで、食糧も燃料も市民に届かなくなっていました。ショスタコーヴィチは生まれ故郷であるレニングラードを離れずに、この作品の第3楽章までを完成させましたが、やがて避難命令を受けて家を出なければなりません。その後レニングラードではおよそ2年半もの間封鎖され、爆撃も繰り返され、60万人以上もの人々が犠牲になったと言われています。この交響曲には、そうした状況に対するショスタコーヴィチの恐怖や悲しみや憤りが感じられるかもしれません。



第1楽章では「人間の主題」と呼ばれる力強いテーマで始まります。やがて穏やかな「平和な生活の主題」が聞こえてきます。その後、小太鼓のリズムが響き、「戦争の主題」が繰り返されます。第2楽章では、軽やかでありながら、どこか物悲しい雰囲気もたたえた音楽となり、中間部では管楽器が皮肉っぽくおどけたようなモチーフを奏でます。ゆったりとした第3楽章では教会の讃美歌のような調べが響き、続けて演奏される第4楽章はリズムカルで勇ましいメロディーや同音連打が、勝利に向かって突き進むように登場します。第1楽章の「人間の主題」が高らかに鳴り響いて締めくくられます。

文／飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

指揮 クラウス・マケラ Klaus MÄKELÄ



1996年ヘルシンキ生まれ。シベリウス・アカデミーにて指揮をヨルマ・パヌラに、チェロをマルコ・ユロネン、ティモ・ハンヒネン、ハンヌ・キースキに師事。

現在、オスロ・フィルの首席指揮者と芸術顧問、パリ管弦楽団の芸術顧問と音楽監督を務めています。2027年にはロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団の首席指揮者に就任する予定。都響とは、日本デビューとなった2018年5月の公演以来、2度目の共演です。

オーケストラ配置図（6月26日 プロムナードコンサートNo.397）

演奏する曲によって使わない楽器もあります。
どの曲にどの楽器が使われているかにも注目してみてください。

大太鼓・小太鼓・シンバル・タムタム
トライアングル・タイゴング
スレイベル・ヴィブラフォン
チャイム・ウインドチャイム
グロッケン・プレートベル
タンブリン・シロフォン



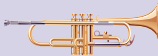
ティンパニ



バンダ（Banda）



※舞台袖または客席で演奏することもあります



トランペット



トロンボーン



チューバ



ホルン



クラリネット
バスクラリネット



ファゴット
コントラファゴット



フルート
ピッコロ
アルトフルート



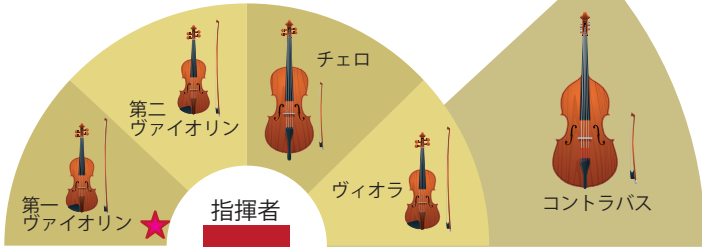
オーボエ
イングリッシュホルン



ピアノ



ハープ



第一ヴァイオリン ★
第二ヴァイオリン
チェロ
ヴィオラ
コントラバス
指揮者
★コンサートマスター

※楽器の配置は一例です。当日のステージで確認してください。

TMSO
東京都交響楽団



東京オリンピックの記念事業として
1965年に東京都が設立しました。
都響（ときょう）という愛称で親しま
れています。

上野の東京文化会館を本拠地として、サントリーホールや東京芸術
劇場などで定期的にオーケストラの演奏会を開催しています。その他、
交響組曲『ドラゴンクエスト』（全シリーズ）や『Fate/Grand Order』など
ゲーム音楽の演奏や、都内の小中学生を対象に開催している音楽鑑賞教室、
病院や福祉施設への出張演奏など多彩な活動に取り組んでいます。

2021年7月に開催された東京2020オリンピック競技大会開会式では、
「オリンピック賛歌」の演奏（大野和士指揮／録音）を務めました。